

## ◆ 川崎さんから受講生へのコメント

07年秋、「芸能とメディア」について授業に参加させていただきました毎日新聞学芸部の川崎浩です。素人の、講義になっていない講義に長時間お付き合い頂き、遅ればせながら、こちらこそ有難うございました、とお礼を述べさせていただきます。テーマは大ざっぱ、話はとんでもないところに進んでいき、まさに私の専門のジャズのように、少しは学問のお役に立てたでしょうか？ と心配であります。

さて、皆さんの感想文を読ませていただきまして、すべての方が私の申し上げたいことを理解されておりました。問題ありかな、と思うのは、私が講義の場で経験から述べた仮説のようなもの、自分なりに整合性がとれており人様に話して理論となっているもの……が、本当に理解して頂いていいものなのか？ というところなのです。

だって、一見理屈に合っているようでも、話に登場したすべての事柄を上下裏表ひっくり返して答え合わせをしたわけではないのですから。これが学問というものの怖いところです。時間が掛かる。無責任のようですが。

そういう意味から、こんな芸能ネタ話でも、メディアの力学の中でとらえることができるのだ、という考え方、感じ方だけでも持っていて頂ければ、今後メディアの洪水の中で生活する、あるいはメディアを考えていく皆さんにとって私が話した1時間半は無駄ではなかったと思います。

なお、「メディアの責任はどうなるのだ」「責任について触れていない」という指摘を幾人かの方から頂きました。まさにこの時代、当を得た質問だと思います。「責任」は今、そして暫くの間、メディアに身を置く立場でなくとも、社会生活を行う者として、かなりプライオリティの高い「言葉」になると思います。ここが面白いところで、「責任」ではなく「責任という言葉」が重要なのです。

この問題は、メディア論より大きく社会心理学に関わる事柄ですが、これから訪れるであろう国民皆責任者であり、国民皆被害者であり、国民皆加害者である状況を想定して、この言葉を考えてみると、簡単に言えば、「誰か」は「責任を考える」時、大抵「責任はない」と言うために「責任は果たした」と言い、そのために事前に「責任逃れ」のためのルールを作る、ということをついつい考え始めてしまうのです。

例えば新宿駅ホームで、「危険ですので白線から下がってお歩きください」というアナウンスが、一日中叫ばれ続けているのはご存知の通りです。20本以上のホームで同時に何度もこのフレーズが繰り返される。人は、どのホームのことを言っているのか理解できないし聞き取れないし聞き流すしかない。さ、そこで事故が起きたとしましょう。ちゃんとアナウンスが届いていれば、事故は起きなかったとしましょう。さて、責任はどこにある？ 駅？ だが、アナウンスはされていた。届かないアナウンスはアナウンスではない、と証明できません。誰かには、届いていたかも知れませんが。鉄道会社は事前に責任の発生を想定・理解し事前の警告責任を果たしていたわけですから。さて、鉄道会社は本当に責任を果たしていたのか。

コンビニでお釣りを貰う時、最近「一緒にお数教えてください」と言われる。一見、お釣りを間違えないように、と親切に責任を果たしているように見える。ですが、客は、余分にお金を払っているわけですから、ちゃんとお釣りを発生させる責任は店にある。だって数を数えられない幼児が来たら、目の見えない人が来たらどうするのか。これは、責任を超えて義務とっていい。実は「一緒に」は「お前が数えたんだから後で文句を言うな」という脅し、よく言って免責、つまりは結局、責任逃れでしかないのです。さ、これを「責任を果たした」といえるでしょうか？

私は「責任」とは自分の行動・役目を間違いなくやり遂げること、と解釈します。メディアの責任という「言葉」は、取材対象者と報道享受者に対して、考えることなのでしょう。ですが、私はそれより「完全な報道」を書き上げる、そのことだけに集中したい、と思う方なのです。「報道そのものに対する責任」だけを考えた。このことと、取材対象者や報道享受者に対する責任とは異なるものなのです。人が転落しないようなホーム作りを考えたい、お釣りを自分でちゃんと数えたい、と言っているわけで、「責任逃れ」をしているわけではありませんよ。

先に述べたように、「メディア責任論」は大きな問題です。まだまだいい加減にしか解釈していない身としては、講義の折に言及することは避けました。これからの問題として是非皆さんで考えて頂きたいと浅学ながらお願いしたいと思います。

本当に有難うございました。

毎日新聞学芸部・川崎浩